フィンガー・ピッカー住出勝則氏が、新たなるギタリストを発見して、日本ツアーを行った。
カナダ人ギタリストと言えば、ドン・ロス氏が御馴染みだが、
同じ名前のドン・アルダー氏とは、いったい??

MASAさんのオリジナリティーは最高さ.....*Don Alder*
ドンさんの歌、声がセクシーなんだよね.....*Masa Sumide*

住出勝則＆ドン・アルダー インタビュー

取材●いちむらまさき　通訳●前むつみ　撮影●吉浜弘之

―そもそも、お2人は、どこで知り合ったのですか？

住出：去年の春に台湾へ演奏しに行った時に、同じツアーで何カ所か一緒のステージに立ったんですよ。それで、一目見た時に「おお！このグルヴィーなプレイは！」と。まぁ、僕が外人だったら、こんな感じなのかなと思って、喋ってみても面白いんでね、それで日本で2人でコンサートをやってみないかと誘ったら「行く行く行く！」と。

―そのツアーというのは、何人かのギタリストが参加したのですか？

住出：3人、3人で入れ替わって行くといったスタイルでのコンサート・ツアーでね、その中でクロスする感じで彼と知り合って.....、ステージは合計3回一緒に立ったのかな。それで、アンコール曲をやる時になって「Sukiyaki（上を向いて歩こう）」を唄ってみたら、ドンが一緒に唄い出してビックリしたわぁ（笑）。

Don：「Sukiyaki」のコード進行は分からなかったけど、子供の頃から知っている曲だったんだ。

住出：外国のアーティストで、サビだけとはいえ日本語の歌詞を、完璧な発音で唄える人を見たのは初めてだったからねぇ。

Don：サンキュウ（笑）。

―いつ「Sukiyaki」を知ったのですか？

Don：若い頃、ハイ・スクールでバレー・ボールをやっていて、全米も回ったんだけど、その流れで日本のチームがカナダに来て、試合をしたことがあるんだ。バレーだけじゃなく、文化交流としてのイベント的な部分があって、彼等から初めて知ったんだ。

―いつギターを始めたのですか？

Don：つい、こないだ（笑）。

住出：なんでやねん！（笑）。

Don：若い頃にスイミング・スクールに通っていたんだけど、ちょっとした病気で入院しちゃって.....、その時に入院中に暇だろうってことで、父がシンプソン・シリーズというエレキ・ギターを買ってくれたんだ。それで、ローリング・ストーンズの「サティスファクション」とかをずっと弾いててネ、退院してからは、ギターに触らなくなっちゃたんだけど、5年くらい前からアコースティック・ギターを弾き始めたんだよ。

―カナダと言えば、ジョニ・ミッチェルがオープン・チューニングでも知られていますよね？

Don：ああ、そこには少し悲しい話なんだけど、僕がエレキでロックンロールを弾いている間にも、女性の友人シンガーから「ジョニ・ミッチェルも聴いてみて」と言われててネ。それでも僕は「NO！僕はブラック・サバスさ！」とか言って聴こうとはしなかった。マリア・マルダーの「真夜中のオアシス」で弾

Fコードを押さえる住出氏。

いているエイモス・ギャレットのソロとかは好きだったけど、ロックンローラーだったわけさ。そんなある日、その友人が殺人事件に巻き込まれて亡くなってしまってネ。それから、ジョニ・ミッチェルを聴くようになったんだ。

—ドンさんのギター・チューニングではDADGADが多いですよね？

Don：そうだね。でも他のチューニングも使うよ。僕が住んでいた町は田舎だったから、情報も少なかったんだけど、ブルース・コバーンやドン・ロスのプレイを聴いて、なんとなくチューニングを見つけていったんだ。

—カナダでも、アメリカの音楽は普通に多く聴けたのですか？

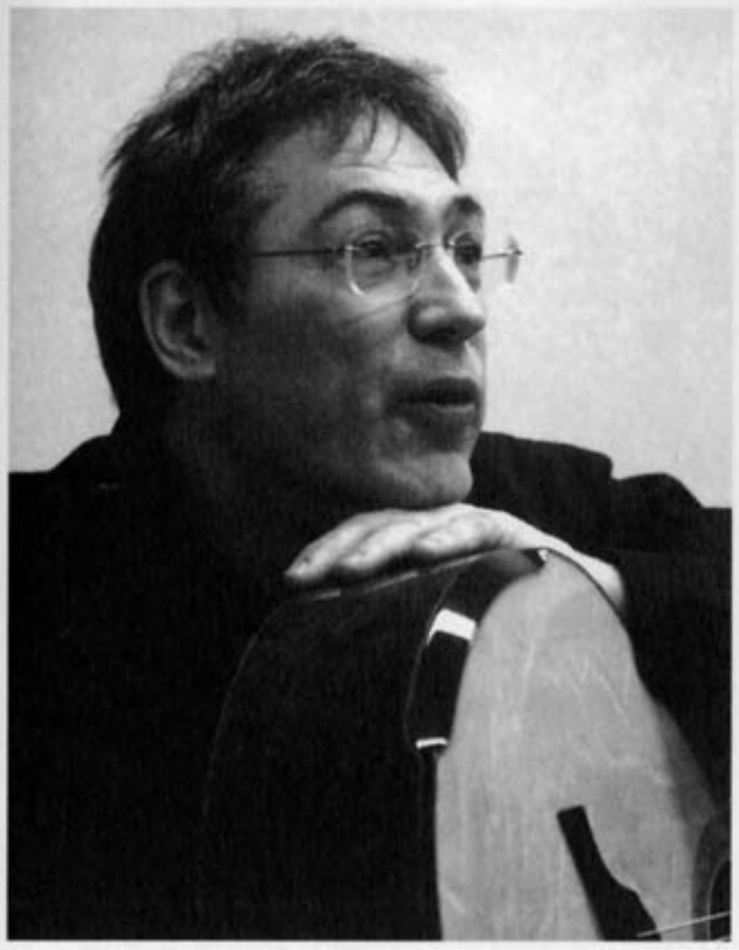
Don：アメリカの音楽も普通に聴いてたし、日本の音楽も聴いてたよ。"ヒロシマ"というグループが好きなんだよ。僕は86年に日本に来た事があるんだ。その時に、琴の音とかも好きになって、名古屋で琴を買って帰ったんだ。まぁ、その来日はギターの演奏に来たんじゃなくって、ボランティア的なチャリティーで来たんだけどネ。

—お二人の今回のギターは？

住出：僕はねぇ、アルバート＆ミュラーのS-3っていうギター。ピックアップはB-BANDが付いてる。

Don：僕のは、マイケル・グリーンフィールドというカナダ人の製作家が作った僕のシグネチャー・モデルだよ。

住出：彼のギターねぇ、チューニングが合うっていう話で、フレットが斜めになっててねぇ。凄いギターだよね。



ボディーのサイドにもサウンド・ホールが。

ドン・アルダー氏の使用ギターはカナダの製作家マイケル・グリーンフィールド製作の自身のシグネチャー・モデル。ファン・フレット仕様で、サイドにもサウンドホールがある。

Don：最初は、Fコードが押さえにくいけど、だんだん慣れてくるよ。ピックアップは3つ付いてる。

住出：ピエゾと、マグネットと、AKGのマイクが付いてるんだって。

Don：それを、ヤマハのミキサーでバランスを取っているんだ。

—ギターのボディー・サイド（顔側）にもサウンドホールが空いてますね。

Don：ステージで音量を出すとハウリングが起こるんだけど、それは低音の音量が原因ということで、その低音を逃がすという役目らしいよ。

—ドンさんのウェブ・サイトで、左手をネックの上から出してプレイしているのを見ました（インタビューはステージ前に行った）。住出さん、今回のステージでもドンさんは、やっているのですか？

住出：うん、やってるね。そう何曲もソレなわけじゃないけど。

Don：まぁ、あの奏法が僕の中心なわけじゃないけど、前に、カナダであるギター・コンテストがあってね。スティーヴ・ヴァイとかヴァン・ヘイレンとかが好きなハード・ロック野郎が出るコンテストで、それにアコギで出場して優勝したことがあるんだよ（笑）。

—ドンさんはサム・ピックも使用してるようですが、右手の爪は....何か付けてますね？

Don：そうだね。

住出：これ、接着剤を付けてるんだけど、その接着剤でかぶれるんだって。カワイそうに。

住出氏のギターはドイツのアルバート＆ミューラーのS-3モデル。

Don：元々、爪が弱いんだよ、僕は。でも、MASAさんのプレイ見てからは、爪無しで弾けるようにしてみたいと考えているよ。カルシウム取るとかしてネ.....。

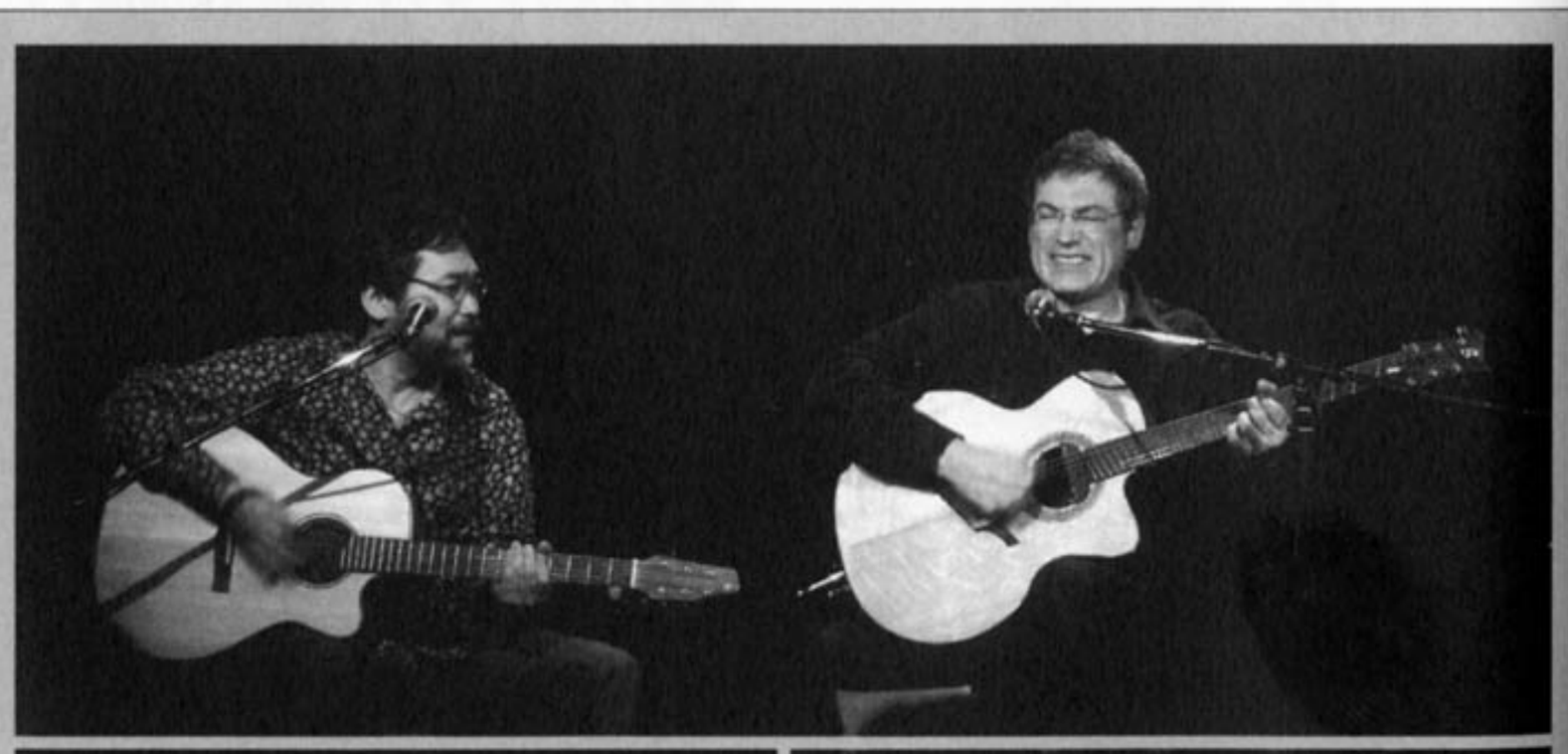
住出：僕は、爪が強いのかもなぁ。皆、悩んでるみたいやけど。ローレンス・ジューバーも、タック・アンドレスも、皆、最終的には爪を諦めて、指先の肉で弾くようになっているね、最近は。トミー・エマニュエルなんかも、胼胝

(タコ)みたいな固い指先してたよね。
—昨日までに、大阪と名古屋と神戸でライヴをやって、その感触はいかがでした?
住出:うん、上手い具合に盛り上がったよ。
Don:最初はナーバスだったよ(笑)。英語が通じないだろうし、MASAさんがあまりにも凄い演奏するから、その後でステージに立つのは緊張したよ。カナダのお客さんと比べると日本のお客さんは、どちらかと言えば静かだけど、真剣に聴いてくれているのが解って、だんだんリラックスしてきたね。
住出:いや、でも、会話が通じないなりに、伝えようとする姿勢ってのは、伝わるから、お客さんも楽しんでくれたみたい。
—住出さん、ニュー・アルバムが出ますよね?
住出:5月の頭に出ますよ。タイトルの『YOU ARE GOLD』のゴールドは、「金」だけど「貴重な」という意味もあって、それは家族やお客さんや、これまで支えてくれた人、全てへのメッセージという意味です。それを僕としては今回、バラードよりもグルーヴな方向性でまとめてみたかったんですよ。昔の曲をセルフ・カヴァーとして3曲ほど再録音して収録して、新曲12曲とで合計15曲。今回は、ジャケット写真にギターが写っていないんですよ、韓流スターを意識して(笑)。
—カバー曲は無しで?
住出:今回は無し。まぁ、ライヴではその都度、色んなカバー曲をプレイしてますけど。昔のフォークで良い曲がいっぱいあるんですよね。そういうのは、アルバムに入ってない曲でも、ライヴならではとして演奏して行きます。
Don:今まで、色んなギタリストと共演してきたけど、MASAさんのようなギタリストは初めてだよ。ファンキーなうえにジャズの要素もあって、メロディアスで、音も良い。本当に今回は勉強になっている。
住出:はい、もっと言って、もっと言って(笑)。
Don:人には、各国によってイメージというのがあるよね。日本人のイメージというのは「コピーが上手い人達」というイメージがあるんだけど、MASAさんのオリジナリティーは最高さ。セッションも楽しいよ。
住出:ありがとうございます。その通りだと思います(笑)。いやいやいや〜冗談、冗談よ!(笑)。僕はね、ドンさんのギターもそうだけど、唄が好きなんですよ。声がセクシーなんだよね。
Don:もっと言って(笑)。

住出勝則『YOU ARE GOLD』

前回のアルバムがカバー集だったことから、今回は、全曲オリジナルの全15曲という現在の住出氏の持てる世界を惜しみなく詰め込んだひとつの集大成。もちろん、ファンク曲、ジャズ・フィーリングも満載で、まずは1曲目の出だしからワイルドなフレーズがカッコ良い。ファンク・ベーシストとドラマーとギタリストがトリオ・バンドとして演奏しているようなサウンドを、ひとりで弾いてしまう独自の世界観は、今後も広まって行くに違いなく、特に12曲目の「Satori」は彼の代表曲として語られて行くだろう。

Don Alder
『CD/DVD Combo Set』

ドン・アルダー氏のCD/DVDがセットになったお得なメディア。DVD映像は、どちらかと言えば、これまでに撮影してあった物からの寄せ集め的なもので、かなりラフな撮影ではあるものの、だからこそ色々な会場でプレイしてきたドンの活動が垣間みれる面白い面がある。野外でのライヴ映像を見ると、今後の日本のフィンガーピッキング界、まだまだ広がって行ける可能性を考えさせられる。CDは、速弾き曲の多いDVDよりも、ドン氏の持つイメージ感は広い。本来『Take the Train Eh!』というアルバムのそれは、ファンキー曲とスロー・バラードのバランスが成り立っており、歌物も収録

"THE GROOVE BROTHERS TOUR"の東京公演は、3/20(月)新宿曙橋バック・イン・タウンで行われた。住出氏が1部、ドン氏が2部、そして最後はセッションというスタイル。どちらも、グルーヴィン・ギタリストということで、ワイルドなプレイをする点に共通点はあるものの、楽曲のアレンジには、それぞれの個性が光る。住出氏の日本のフォーク曲をカバーする演奏も含めた旅情感あふれるステージでは、喋りも楽しめ、そのMCとある種のギャップもあるバラードと、激しいロック色のフィンガー・ピッキングで観客を魅了。ドン氏は、英語の喋りが伝わりにくい分、楽曲数でカバーし、そのプレイは、まずコード弾きの速弾きに特徴がある。どこかカントリー的なギャロッピングに近い感じでピッキングするベース音と和音の交互がとにかく圧倒的。そして、何曲かの歌物と、左手をネックの上から出して弦を押さえる曲も披露。観客は、おそらく知らない曲ばかりであったはずだが、充分楽しめたステージだった。そして、最後には、スティーヴィー・ワンダーとジェフ・ベックで知られる曲「迷信」をセッションしたのだが、その数分間の中での2人の音の駆け引きと、有って無いようなタイミングの合図、フレーズ自体で相手を煽るというコンビネーションが、会場を笑わせ、興奮させた。